

ついに「18歳人口の激減」が始まる

私大の4割が潰れ、教員大失職



「日本の大学経営は、大学進学率の上昇によって支えられてきました。しかし11年以降、大学進学率は約50%で頭打ちになり、18年からは18歳人口が大きく減り始めます。18年は17年より2万人減って118万人になる。その後の6年間も2万人ずつ減り続ける。毎年1万人、大学受験者が減ることになります。18年以降、入学定員1000人規模の大学が毎年10校消滅する計算です」(教育ジャーナリストの山内太地氏)

大学崩壊のシナリオが現実のものになりつつある。私立大学では学生数が定員の70%を切ると補助金の減額幅が大きくな

り、経営が苦しくなるが、現在、全国79の私立大学がすでにこの危険水域に達している。

さらに16年の調査では日本に約600校ある私立大学のうち4割が「入学定員割れ」に陥っている。18歳人口が減少していく今後、この数字が改善することはない。

前出の山内氏は18歳人口の減少とともに、大学間格差が拡大、「ブランド」のない大学から次々と潰れていくと見る。17年段階で「定員割れ」している私立大学などは、18年から倒産するところが出てきて何ら不思議ではない。「ブランド力がある」

とは知名度がそれなりにあり、受験者を集められるということ。最低でも

「大東亜帝国」のように一般的な知名度がないと名前前で学生を集めることができません。一方で看護師、管理栄養士など確かな資格が取れる大学、『手に職がつく』大学はなんとか生き残ります。

しかし、90年代後半から00年代に作られた大学は危ない。現在、定員割れを起こしている大学の大半は団塊ジュニアの入学を見越してこの時期に設立されました。当時、受験パブルに浮かれ、短絡的に4年制大学化した短大などは真つ先に潰れ

るでしょう」

例えば、東京女子学院短期大学を前身とし、02年に4年制大学に転身した東京女子学院大学は17年の11月に経営不振で閉校に追い込まれている。

大学講師がコンピニでアルバイト

大学が潰れて最も困るのは、そこで働く教員たちだ。

「専門職系の大学教員であれば、企業に転職するという道が残されています。看護系の大学なら医療の現場へ、スポーツ系の大学ならトレーナーや

地方国立大学も危ない

インストラクターへ転職すればいい。厳しいのは一般的な4年制大学の場合です。定職に就けないようなら、私大の非常勤講師になって、薄給で大量の仕事をこなすしかない。それでも仕事があるだけまだまし。

私大の非常勤講師にもなれなかつたら、アルバイトをしながら暮らすか、親の腰をかじって生きていくしかない(都内の大学職員)

仮に職にありついても、いまや大学教員は任期制があたりまえ。非常勤講師は専任教授の10分の1ほどの賃金で使い倒された挙げ句、大学を放り出されることになる。

若手の非常勤講師の中には、生活のためにコンピニなど他のアルバイトをしている者も少なくない。

もはや先生より学生がありがたがられる時代が近づいてきている。

週刊現代 2017.12.30号